



名誉会員 故 大城 芳樹氏
<門下生による米寿祝賀会にて，平成29年6月10日 松本泰育氏撮影>

追悼

大城 芳樹先生を偲んで

小松 満 男

(大阪大学名誉教授)

本会平成6年度会長で名誉会員の大城芳樹先生が、本年8月7日に87歳の天寿を全うされ安らかに永遠の眠りに就かれました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

先生は昭和5年6月1日に大阪市でお生まれになり、大阪学園大阪高校を経て、大阪大学工学部応用化学科へ進学され、昭和30年にご卒業になりました。大学では小森三郎先生のもとで研究に励まれ、昭和35年に博士課程を修了し、同年、工学部応用化学科(小森研究室)助手に任官されました。昭和41年に、阿河利男先生が新設の石油化学科の教授に昇任され、大城先生も助教授として移られました。油化学を基盤にしつつ新分野の研究に挑戦されて、昭和61年に応用精密化学科(旧石油化学科)の教授に就任されました。平成6年3月に定年退官され、この間、一貫して広範で先見的な視野と高邁な見識をもって教育、研究の推進ならびに後進の育成に情熱を注がれ、幾多の優れた人材を社会に送り出し、産業界や学術界の発展に大きく寄与されました。ご退官後は近畿大学特任教授として引き続き研究、教育に力を注がれ、平成13年に定年退職されました。

先生は合成化学分野参入のバリアを短期間で克服されました。まず、マレイン化オレイン酸トリエステル系PVC用高機能可塑剤の合成研究にはじまり、アルキルアミンとエチレンオキシドの自動酸化反応の発見により高品質ポリオキシエチレンアルキルアミンの合成に成功されました。これらを含む脂肪族化合物の官能基変換に多くの独創的な方法論を確立され、昭和62年度日本油化学協会・論文賞を受賞されました。また、機能性複素環化合物の分子設計に関して、ヘテロ原子化合物や有機金属中間体の特性に着目し、多官能複素環合成の画期的な方法を多数開発し、複素環化学における先導的研究者として地位を築かれました。さらに、生体内酸化還元過程で重要なキノプロテインの新規補酵素類の機能解明とモデル化合物の開発でも先駆的な研究を展開し、生化学分野にまで進出して注目されました。時代を先取りする先見性に基づく卓越した業績に対し、平成6年度有機合成化学協会賞が授与されました。

先生は、大学内においては教務や大学院問題などに関わる多数の要職を務められ、大学の管理運営や発展に貢献されました。学協会関係では、まず本会において、関西支部常任幹事長や、総務委員長、運営委員長などをはじめ多くの重職を歴任され、理事、副会長を経て、平成6年には会長に就任されました。先生はこの間、本部機構の改革、部会の全国的再編、関東支部の設立、油化学協会から油化学会への移行の基盤整備など、本会の発展と活性化に大変なご尽力をされましたことは、先生の熱意とお人柄によるところが大きく、皆様のご記憶に新しいことと存じます。他学会でも日本化学会副会長、近畿化学協会会長、有機合成化学協会理事など、多くの学協会でも様々な役職を務めて、その発展に多大な貢献をされました。

大城先生には仕事上では厳しくご指導いただきましたが、仕事を一步離れると大変優しく様々なことを教えていただきました。よく「和」や「人との絆」の大切さを説かれましたが、先生の人脈の広さには驚くばかりでした。ご経験豊富で博識で、世事に疎い私のような者が他研究室からも、人生問題から日常的なことまで相談に来ていましたが、嫌な顔一つせず、色々ご教示いただきました。先生が多くの方から敬愛される理由の一つだと思います。一方、ご家族思いで、ご帰宅後ご子息の就寝を待って夜遅くまで机に向かっている、と奥様からお聞きしました。ご多忙な先生の豊富なアイディアの源泉はそこにあったのです。

先生の厳しくも暖かいご薫陶により広範な分野で活躍している門下生が集い、楽しみにしておられた米寿祝賀会を去る6月10日に催しました。ご入院中でしたが、元気なお姿で卒業生と親しく談笑されました。お疲れが心配でしたが、ご家族や主治医には大変嬉しかったと話されたそうです。ご他界の3日前まで仕事上の愚痴を聞いていただいていた私は、祝賀会でのお写真が先生の最後のものになろうとは夢想だにしませんでした。

先生と過ごした日々のごことが頭を過ぎり、寂しさが募ります。またお目にかかります日まで、どうか安らかに休みください。

合掌